

判事紀末茂 一首【年三十一】

五言臨水觀魚

結^フ宇^ヲ南^ノ林^ノ側^ニ
垂^ル釣^ヲ北^ノ池^ノ澗^ニ
人^ノ來^{レハ}戲^ス鳥^ノ沒^シ
船^ノ渡^{レハ}綠^ノ萍^ノ沈^ム
苔^ノ搖^テ識^リ魚^ノ在^ル在^ル
縉^{ツリイト}盡^テ覺^フ潭^ノ深^キ
空^{シク}嗟^ス芳^ノ餌^ノ下^ニ
獨^ル見^ル有^レ貪^ム心^ニ

結宇は工人を雇はず、自分で作れるくらゐの舎を云ふ。小屋なり。南林中の舎を出で、北池に行て魚を釣る。戯鳥は人の足音を聞て水に没し、水中に浮ぶ緑萍は船の渡る度に沈む。水苔の動搖するは、下に魚あればなり。縉絃の水底に達せざるは、潭が深ければなり。芳餌を惜まざるは、芳魚を獲んと欲する貪心あればなり。見の字愧の字とすれば更に妙なり。

此の詩は、孟浩然の宗派に逼る。頗る出色の作とす。

釋辨正 二一首

辨正法師者。俗姓秦氏。性滑稽。善談論。少年出家。頗洪玄學。太寶年中。遣
學唐國。時遇李隆基龍潛之日。以善圍碁。屢見賞遇。有子朝慶朝元。法師及
慶在唐死。元歸本朝。仕至大夫。天平年中。拜入唐判官。到大唐見天子。
天子以其文故特優詔。厚賞賜。還至本朝。尋卒。

『元享釋書』に辨正が傳無し。故に他書考證すべき術無し。秦氏なりとせば、其
の先は歸化人なること明白なり。頗洪玄學、漢の揚雄に太玄經あり、佛教も玄學
なり、老子も莊子も玄學なり、儒家、法家、刑名家、縱横家、史學家を除き、所
謂超世間的の學は、總て玄學と言ふ。今此の語は、特に「佛老」の玄學ならん
と想像する。大寶は文武天皇の年號、三年を以て慶雲に移る。李隆基、唐室は李
氏、隆基は玄宗の名。龍潛之日は、未だ帝位に即かざるの日。年は二十歳前後な
らん。玄宗は諸藝通ぜざるは無し、辨正が圍碁に巧なるを以て賞遇せられし者と
思はる。入唐の時、其の子の朝慶と朝元との二人を伴ひて行き、而して父と長兄
とは彼に於て死し、朝元のみ歸朝せしものゝ如し、天平元年は、大寶元年を去る
二十九年後なり。乃ち隆基が即位して玄宗帝と稱し、開元の文學隆盛を極めし時
なり。大唐天子は玄宗帝なり。

五言與朝主人

鐘鼓沸城闐
戎蕃預國親
神明今漢主
柔遠靜胡塵
琴歌馬上怨
楊柳曲中春

唯_リ有_二關山_、月_一
偏_二迎_、北塞_、人_一

朝主人は、唐に在て寓舎の主人を指すならん。鐘鼓は朝參を報ずる時計なり。此の曉漏を聞けば、戎臣も蕃臣も、參内して以て和交の親を表す。而かも天子は神明なり。神明の質なればこそ、所謂遠人も柔げる智力あり。胡塵を安靜せしめる所以。琴歌馬上怨、楊柳曲中春此の十字の意は上に胡塵の文字有るに依て出づ。王昭君が胡に嫁せんとするの日、馬上に於て怨歌を謳ふ。又胡地は沙漠、中國の如く楊柳が春日青青と生ずるの觀は無し。其の楊柳を想像するには唯、笛の曲に於て之を奏するのみ。漢の百里奚妻に琴歌あり、司馬相如も霍去病も唐の張祐にも琴歌あり。折楊柳曲は梁元帝以來、唐賢の集に往往あり。關山月も樂府題の詩として、梁元帝、陳後主、六朝より唐に及ぶ諸家の集に散見する所、總て是れ離別を傷むの詞なり。今辨正は、遠く日本を離れて禹域に在るが、其の情は故山を忘れず、而かも關山月は北塞より來るの人を迎へるが、日本より來るの人は迎へず。自分が孤獨で他國に在るは、洵とに寂寞の情に堪へずとの意なり。

此の篇、洵とに古樂府の遺響あり。全く漢人の作、和臭絶て無し。此卷大友より此に至る十五人、實に此の詩を以て第一とす。意心に身彼に在て、彼等の名篇を讀む。遂に此の絶妙の詞が成りしなり。

五言在_レ唐憶_二本郷_一一絶

日邊瞻_ル日本_一
雲裏望_ム雲瑞_一
遠游勞_シ遠國_一
長恨苦_{シム}長安_一

日日、雲雲、遠遠、長長、同字を使用して、一篇の結構を取る。樂天の集なぞ

に此の種の七律あり、一絶、他の詩は皆一首とあり、之れのみ一絶とす。絶の截セツなる所以、初唐以來正しき説と見るべし。

正五位下大學頭調忌寸老人 一首

五言三月三日應詔

玄覽動_シ春節_ニ
宸駕出_ツ離宮_ヲ
勝境既寂絶
雅趣亦無_レ窮
折_レ花梅苑_ヲ側
酌醴碧瀾_ヲ中
神仙非_レ存_レ意
廣濟是_ト攸_レ同_{スル}
鼓腹太平_ヲ日
共詠_ス太平_ヲ風

彼に在ては三月三日を祝する會、晉の世に起れり。我に在ては顯宗天皇【二十二代】の元年に、始めて行ふ。上巳_{シヤウシ}、重三、數千年節句として行はる。明治以後は盛ならざるのみ。玄覽は『老子』に出づ。滌除玄覽。能無_レ疵乎。注に曰く、心居_テ玄冥之處_ニ。覽_ニ知萬事_ヲ。故謂_ニ之玄覽_ト。今の句は天子が宮中を出て、以て春物を觀覽し玉ふを謂ふ。宸駕の句、字の如し。勝境は今日宴を設ける地、即ち絶勝の佳境。喧雜なく、良とに雅趣窮まり無し。折花は梅花ならんが、上巳に用ゆるもの多くは是れ桃花なり。蓋し事實梅なれば、亦論ずるに及ばず。醴_レは醴酒、醴漿、「アマザケ」なり。碧瀾中は水中に舟を泛べて以て會す、晉の曲水の故事に倣へばなり。神仙非存意、神仙を慕ふの、神仙に爲らんと欲するのと、聊かも神仙には關係せず。但廣濟是攸_レ同_、君も臣も我も彼も、此の幸福を同うせんと欲する攸_ノみ。是の故に堯日舜天、鼓腹して以て太平の風を咏ぜん。

莊重の氣分を失はず、應詔の作として、稍々其の體を備ふと謂ふ可し。

贈正一位太政大臣藤原朝臣史フヒト 五首【年六十二】

五言元日應詔 一首

正朝觀萬國ヲ
元日臨兆民ニ
有政敷玄造ヲ
撫機御紫宸ニ
年華已非故ニ
淑氣亦維新ナリ
鮮雲秀五彩ニ
麗景耀三春ニ
濟濟周行士ヲ
穆穆我朝人ヲ
感德遊天澤ニ
飲和惟聖塵ヲ

史は、或は不比等に作る。鎌足の子。官右大臣。大寶和銅養老の際に歴仕し、功天下第一と爲す。謚して文忠公。贈太政大臣、淡海公に追封せらる。養老四年、舍人親王が日本書紀を上りし年、八月を以て薨す。然らば此の元日應詔は文武天皇なるや、元明天皇なるや、元正天皇なるや、今は之を知るを得ず。正朝は即ち元日、元日は即ち正朝なり。萬國は日本全土を指す。兆民は日本全臣民を指す。天子が政堂に臨御し玉うて、一年の政治を新にする。有政は即ち善政なり。玄造は、漢の李邕が「海州大雲寺禪院碑」に、天也地也攝生之謂玄造。善政を敷き以て自然のまゝに民を治めんとなり。撫機、即ち人民を愛撫する。紫宸を御する所以は、天子安逸の爲ならんや、羣機を撫する爲めなるのみ。年華已非故一月より十二月と、三百六十五日を以て年華は故と爲る。然るに今日は一月一日、正朝な

り、元朝なり、元日なり。淑氣も惟新なり。其の淑氣は何處に在る、所謂鮮雲は五彩を成て秀で、麗景は三春の初を耀かす。濟濟は物の多き貌。周行は『詩經』に人之好我、示我周行とあり、乃ち至美の道を蹈む土の多きを謂ふ。穆穆は『詩經』に出づ。穆穆文王、『禮』に天子穆穆。天子のみならず大臣の徳ある人にも用ふ。今は立派なる大臣が朝に滿つとなり。感徳遊天澤、天子の徳に感じて、天の恩澤に優遊する。飲和は『莊子』に飲人以和と、牛弘樂府に、飲和飽徳、恩風長扇と、愛を以て人に被らし、飲を以て之に飲しむが如きを謂ふなり。聖塵は恐くば、聖仁の誤寫ならん。應詔の詩字を擇び句を選び細心ならざるを得ず。塵の字を用ふる如きは失體と言はざるべからず。余は信ず塵は仁の誤寫なりと。排律として唐賢の下に在らず。

五言春日侍宴應詔 一首

淑氣光天下
薰風扇海濱
春日歡春鳥
蘭生折蘭人
鹽梅道尙故
文酒事猶新
隱逸去幽藪
沒賢陪紫宸

淑氣は春の溫和なる氣。唐の杜審言が淑氣催黃鳥の句あり。其の淑氣が天下に光被する。薰風は電にもあるが、『詩紀』に南風之薰令、可_シ以_テ解_ク吾民之愠_{イカリヲ}とありて、夏日の風を指す。春日に薰を用ゆる前例なし。和風なるべきを薰風と用ゆるは、此の時代用字の例を知らざりしに由る。鳥は即ち黃鳥。折蘭人は高士君子を指すならんか、鹽梅天下を鹽梅する道は、古梗に法るが故に故なり。文酒

は今日御宴の懽會。新なる所以。隱逸の士も、幽藪即ち其の棲居を去て、紫宸に隨陪する。隱逸幽藪の文字は、前句の蘭に應ずと知るべし。但沒賢の字未詳。或は考ふ、賢に非ざる我我も紫宸に陪する光榮を荷ふと、意味又通ず。

五言遊吉野 二首

飛_レ文山水地
命_レ爵薛蘿中
漆姬控鶴舉
柘媛接_テ魚通
煙光巖上翠
日影澗前紅
翻_{カハツテ}知_ル玄圃_ノ近_{コトヲ}
對翫入_レ松風

飛文は詩を作り、文を屬ること。命爵は酒を命じ、杯を把ること。漆姬、柘媛の二句未詳、或は案ず漆は髮の面を言ひ、柘は面の紅を言ふかと、晴煙の光は巖上に翠色を呈し、而して日影は澗即ち岸上平らかにして下の水の深き所、此の所は紅色を呈す。翻知は却知_テと同義なり。玄圃は仙人の住處、吉野は乃ち是れ仙人の住所。是の故に松を吹くの風人間の物にあらず。古溪案ず。萬葉集、仙柘枝歌三首。

霰ふりきしみがたけをさかしみと草取る可奈和妹が手を取る。

右一首或云吉野人味稻與柘枝仙媛歌也、但見柘枝傳無有此歌。

此の夕柘のさえだの流れ成は梁は不打而取らずかもあらむ。

右一首此下無詞諸本同。

古に梁打つ人のなかりせば此間もあらし柘の枝はも。

右一首、若宮年魚麻呂作。

契仲説。

懷風藻に、諸公の吉野にて作れる詩あるを引合せて按ずるに、味稻は吉野川に魚梁打つ者なりけるが、はからざるに仙女柘枝に逢ける事、浦島子が蓬萊に到れる如かりける事を、或人柘枝傳として記せるなるべし。云云。

又此詩どもの中に、柘歌とあるは、柘枝が歌へる曲、傳に見えたる事あるべし。淡海公の詩に漆姫とあるは、七姫なるべし云云。然らば、竹取翁が九箇仙女の類なるべし。又。歌の意を案ずるに、味稻が吉野川に魚梁打て有ける時に、川上より柘の枝流れ來けるを取上げたるが、忽に變じて仙女となりて、味稻と接て誘引して仙境へ歸りけるにや、云云。

夏身夏色古フリ
秋津秋氣新ナリ
昔者同汾后
今之見ル吉賓ヲ
靈仙駕メ鶴ニ去
星客乘レ查カヘル返
渚性ツツニ流ニ水
素心開ク靜仁

夏身、秋津、共に川の名。吉野なる夏實なつみの川。「三吉野の飽津あきつの小野」(萬葉)、夏も秋も共に自然の面目ある意。昔者の十字未考。靈仙は、漢の皇子喬。鶴に駕し上天せし人。星客は漢の張騫、查いかたに乗じて天河を過ぎし人。渚性しづなは渚性恆の誤寫ならん。渚性は恆に流水ならざるを得ず、人の恆性即ち素心は靜仁ならざるを得ず。

雲衣フタタヒ兩觀レ夕ヨ
月鏡一逢フ秋ニ
機下非曾ニ故ニ
援息是威ニ猷シ
鳳蓋隨風ニ轉シ
鵲影逐波ニ浮フ
面前開短ニ樂ヲ
別後悲長ニ愁ヲ

七夕は、七月七日に河鼓織女の二星を祭る。之を乞巧奠キカウテンと謂ふ。「公事根源」に、孝謙天皇の天平勝寶七年に始めて乞巧奠を行ふとある。蓋し七夕を歌ふことは、其の以前なること此の詩を以て知るを得。曹子建が陳琳に與ふる書に、披翠雲ヒ以爲シ衣ト。何中誼が「七夕篇」に、歴歴珠星疑フシハ拖レ佩ヲ。冉冉タル雲衣似ニ曳羅ニ。兩は七月七夕なる故ならん。七夕の月は秋始めて賞するなり。機下織女星が機ハタを下る。曾て故レしと言はんや、今夜も新しく之を觀る。援息の五字未考。鳳蓋は天子の儀仗、蓋は車の「カサ」なり。地上天子の鳳蓋にはあらず、天帝の鳳蓋なり。天を仰で瞻れば、天帝の鳳蓋とも思へるものが、風の吹く毎に動轉する。而して鵲影、所謂「カササギ」の影が天河「アマノガハ」の波を逐うて浮ぶが如し。面前開短樂、河鼓と織女との二星は、今夜限り面會して樂しむが、直ちに分れて來年の七月七夕でなければ面會する能はず。長愁レを爲す所以。

以上五首の中、元日の詩を除きて、餘は鍛鍊を経ざるもの。深く評するに及ばず。

正六位上左史荊助仁 一首【年三十七】

五言詠美人

巫山行雨下クタル
 洛浦迴雪霏
 月泛眉間魄
 雲開髻上暉
 腰遂楚王細ヨ
 體隨漢帝飛ニ
 誰知交甫珮
 留客令忘歸ルコトヲ

巫山は四川省夔州府巫山縣に在る山。楚の宋玉「高唐賦」に、先王嘗游高唐。怠而晝寢。夢見一婦人。曰妾巫山之女也。為高唐之客。閨君游高唐。願薦枕席。王因幸之。去而辭曰。妾在巫山之陽。高丘之岨。旦為朝雲。暮為行雨。洛浦は即ち洛水なり。陳思王が「洛神賦」に曰く、黃初三年。余朝京師。還濟洛川。古人有言。斯水之神。名曰宓妃。と。此の二賦の意を用ひ、以て美人を巫山の神女と、洛水の宓妃とに譬ふ。迴雪霏、「洛神賦」に飄飄兮若流風迴雪とあり。月泛眉間魄、雲開髻上暉、是の十字は、其の顔面の美装を謂ふ。腰遂楚王細、體隨漢帝飛、是の十字は、其の姿態の輕妙を謂ふ。『後漢書』に、楚王愛細腰。宮中多餓死。宮女細腰ならんと欲し、減食に因て餓死するなり。漢の武帝は趙飛燕を愛す。其の細身にして飛燕の如くなればなり。誰知交甫珮、留客今忘歸、是の十字未考。